

医療法人しもいけメディカルクリニック
滋賀県蒲生郡

患者さん本人が「主治医」 セルフケア支援する環境づくり

DOCTOR'S PROFILE

1988年、滋賀医科大学卒業。市長浜病院、公益財団法人豊郷病院、97年、滋賀医科大学大学院卒業、日野記念病院に勤務。2007年、しもいけメディカルクリニックを開業。



理事長 しもいけ ひとし
院長 下池 仁志 先生

循環器専門医としていくつかの病院勤務を経て、2007年11月に開業した。最後の病院勤務医時代に母が悪性関節リウマチに罹患し、その後、母の看病をしていた父が悪性リンパ腫を発症。臨床医として多忙を極めるなかで、私自身が重病の両親のケアをする体験をした。

週に2回、私が車を運転して母を東京の大学病院に通院させたこともある。最後の頃には2人とも私が勤務していた地元の病院に入院させ、リウマチも悪性リンパ腫も専門外だったので、4年間、副主治医のような立場で付き添い、治療を続けた。両親ともにその病院で看取ることになったが、2人のケアをする過程で専門外の疾患について勉強し、患者さんの視点で医療のあり方を考えるなど、さまざまなことを学んだ。そこで体験したことが当クリニックの診療の原点であるといっても過言ではない。

1つは、現在検査値が正常であっても、少しでも状態に変化があれば、その先に病気になることを疑う。どんな疾患でも症状が現れてからは「末期」であることが多く、そこから治療を始めたのでは、回復は見込めないからだ。医師は患者さんの刻々とした変化を捉えていくことが重要であることを痛感した。

病気により患者さんやご家族の大切な

時間が奪われることも肌で実感した。患者さん一人ひとりの健康寿命を少しでも長く延ばすことが、医療者の務めであると考えられる。一方で、両親をケアした4年間は、私の人生で最も幸福な時期ではなかったか、というアンビバレントな思いもある。臨床医生活がスタートしてから、両親と向き合う時間はほとんどなかったが、今振り返ると両親の病気が一緒に過ごす時間を与えてくれたともいえる。病気で被る損失は大きい、前向きに生きてよりよい人生にしていけることは可能だ。そのための最大限のお手伝いをするのも医師の使命であり、当クリニックの基本コンセプトになっている。

早期の病気の発見、スタッフはオーダーメイドの問診技術を修得

早期発見・治療へ導くために、いち早く変化を発見することができるのは患者さん本人、あるいは患者さんを思いやるご家族であると考えている。

専門分野である動脈硬化疾患の最大の危険因子は高血圧であり、時間をかけて個々の患者さんの状態や背景を踏まえたうえで、四季に応じた適切な血圧管理の方法をレクチャーする。根気強く指導し続けると、大半の患者さんは毎朝夕、自分で血

圧管理をして「血圧手帳」に記録するようになる。受診時に手帳を持参することも半ば習慣化した。

さらに睡眠時無呼吸や禁煙の治療を積極的にやっているのは、睡眠障害や喫煙を放置したままでは、血圧コントロールや難治性疾患の予防が不可能だからだ。病気の早期発見や病気が進まないようにするノウハウを提供し、患者さんに実践していただく。つまり、患者さん本人が自ら「主治医」となりセルフケアを実行し、診断・治療へ積極的に参加してもらうことを全力で支援している。

このような医療の実践は、私1人では無理であり、看護師や事務職等のスタッフが全員で、正確な医療知識を患者さんに説明できる体制づくりが不可欠である。ゆえに患者教育とともに、スタッフ教育にも力を入れ、私の考えを受け入れられるスタッフを選んできた。実際、患者さん個々の性格や生活背景を踏まえたオーダーメイドの問診技術を磨き、患者さんを「総合的に診る」という考え方は、6名のスタッフ全員で共有されている。こうした診療が具現化できたのは、私が両親のケアから学ばせてもらった、人生最大のレクチャーによるものと肝に銘じ、今後もスタッフとともに患者さんに向き合い続けていこうと思う。



「症状の出る前に疾患に気づく」をポリシーとする、しもいけメディカルクリニック。いち早く確定診断をつけて専門病院に紹介するために、検査体制の強化に努める



同クリニックの待合室。「クリニックのスタッフは皆、ドクターになり得る」(下池先生)という考えのもと、患者さんが待合室に入るとスタッフが隣に座り、前回受診から現在までの状態をヒアリング。コンプライアンスが低下している場合などは指導も行う